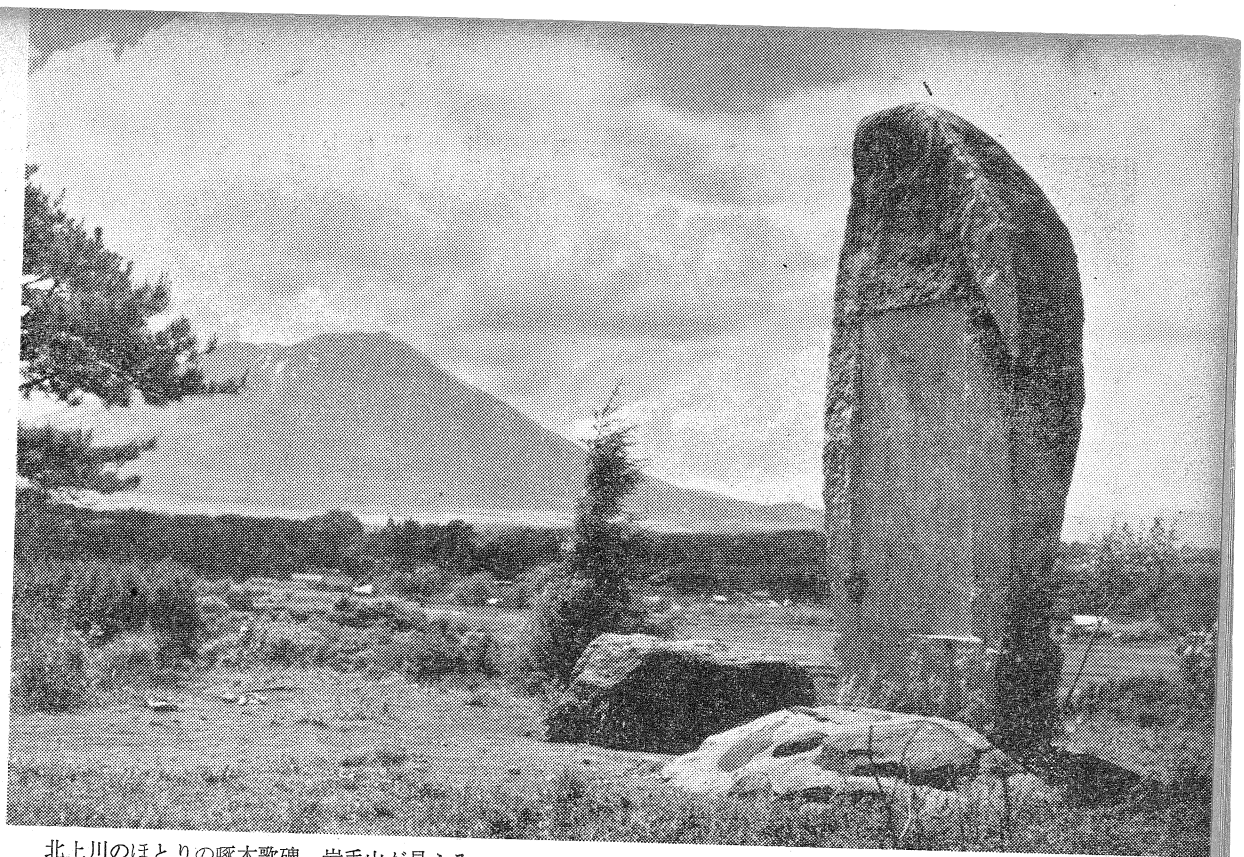


北上川のほとりの啄木歌碑、岩手山が見える。

やわらかに柳あをめる北上の
岸辺目に見ゆ泣けとことくに

渋民への道

——啄木のふるさとを訪ねる——

山本秀男

1

去年の初夏をおもいだしています。

実は一昨日、むかし同じ教室で文学を学んだ連中と久しぶりに飲んだのです。うまく卒業できたものも、できなかつたものも一様に今もつて文学に執着をもつているのですから、似たもの同士の集りといえるでしょう。とにかく話題が一致しているものですから、懐しさも手伝つて随分飲んだような気がします。多分そのせいでしょう。啄木のふるさとを訪ねたときの印象が、妙に鮮やかによみがえつてくるのです。

もちろん半年以上も前のことで、どこにどんな家があり、どこに櫓があつたかは、さだかではありません。こまかいことは殆ど忘れてしまつたといつた方がいいかもしれません。ですが、それだけに渋民への道の雰囲気が、そして渋民の悲しい印象が、私を初夏のおもいでに連れもどすのだと思います。

2

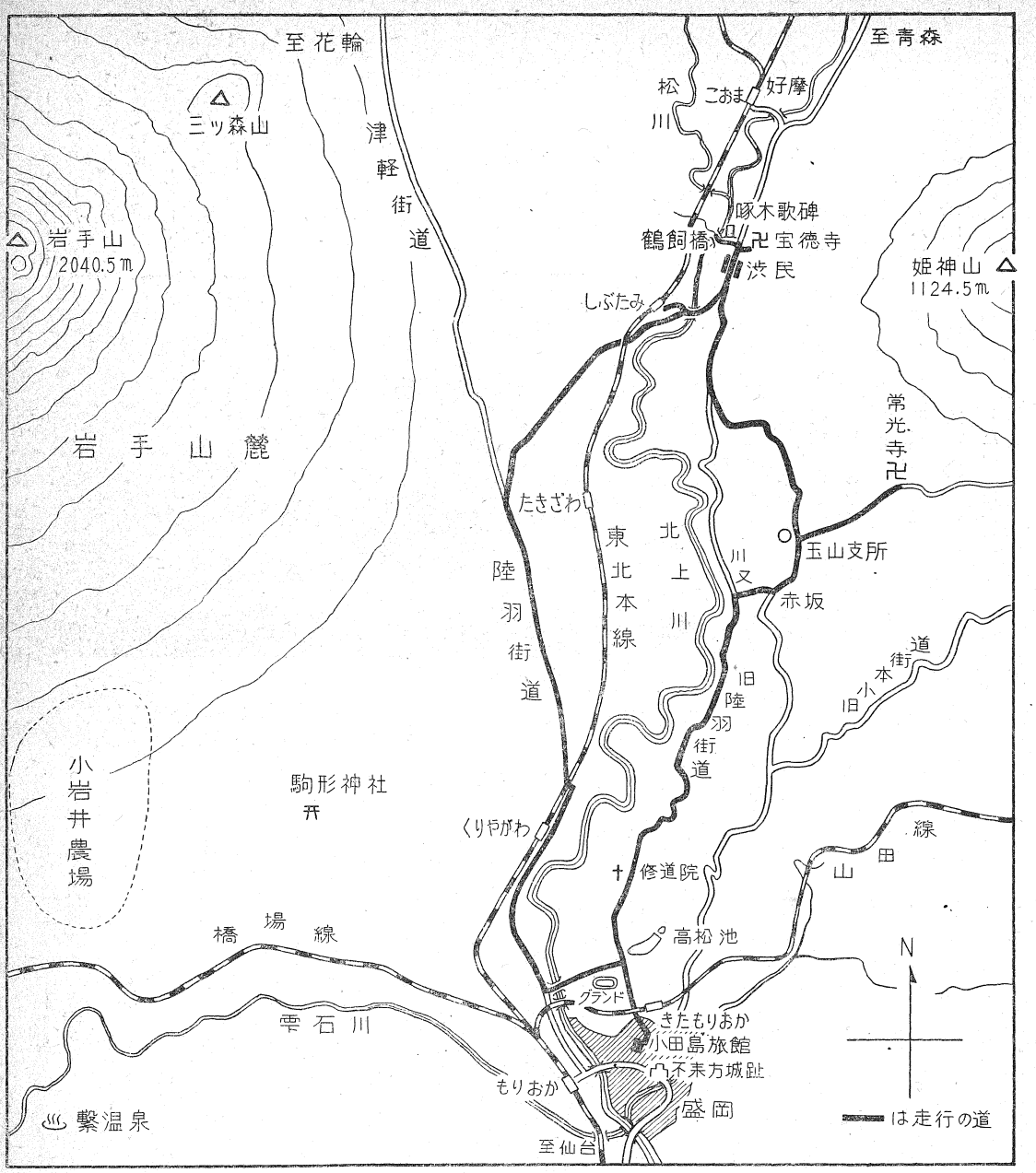
六月のなかばでした。

私は自転車を小口混載急行便で、あらかじめ盛岡駅へと送つておきました。盛岡での仕事が終つたら走ろうという魂胆があつたからです。心配していた天気も、梅雨期に入つているというのに、毎日〳〵晴れわたつて、空は美しい青さで輝やいていました。思えば私が岩手県に行つたころは、東北でも一番よい季節ではなかつたのでしょうか。

東北本線は蒸気機関車です。ポツポツポツと煙を吐いて走つています。それだけでも子供みたいに嬉しくてならなかつたのですが、花巻をすぎ盛岡が近くなるにつれ、どうしても神妙に座席に坐つていることができなくなりました。岩手山を車窓にみつけなければならなかつたからです。

汽車の窓
はるかに北にふるさとの山見えくれば
襟を正すも

啄木のこの歌が私の頭を占領していたのです。当時の汽車は、きつとのろのろと走つたのでしょう。長い長い汽車の旅の末にようやくふるさとの山をみつける。その時の啄木の気持にかねてから深い共感をもつていた私です。啄木が襟を正さずにはいられなかつたその山を、私はみたくてなりませんでした。かつて、この東北本線は北海道旅行のために二往復しましたが、いつも



の啄木の気持にかねてから深い共感をもつていた私です。啄木が襟を正さずにはいられなかつたその山を、私はみたくてなりませんでした。かつて、この東北本線は北海道旅行のために二往復しましたが、いつも夜行のため、ついに岩手山をみることができなかつたのです。思えば十数年来の宿願が、すぐ目の前で達せられようとしているのです。

「オ母サン、アレ、イワテサン」

と反対側の席で子供が窓の外を指さしました。私はびつくりしました。岩手ヤマだと思つていたのです。子供は、はつきりイワテサンと呼んでいるではありませんか。お母さんは「そうよ。イワテさんよ」と答えました。どうみても東京に住まつている人のようですが、きつと盛岡か、その近在をふるさととする人でしよう。そのイワテサンという語感が実にさわやかに感じられるのです。啄木に襟を正させたのは、やはりイワテヤマでなく、イワテサンでなければならないと一瞬のうちに納得しました。そして反対側の席の母子に、ひそかに感謝したことでした。

岩手山は車窓一ぱいに大きな姿を現わしました。それだけではありません。多分空気が違うのでしよう。一口に真赤だというには勿体なさすぎるような、美しい夕焼です。それはそれは複雑な赤さの夕焼なのです。その夕焼空に東側のかなり急な斜面を美しく画いて、シルエットになつているのが岩手山なのです。荘厳というべきでしよ

うか。私は自分で満足する言葉を見つけ出せないままに襟を正す気持になりました。そして夕焼空が、しずかに暗くなるのを見ていました。

このときです。どうしても渋民へいかなくてはならないと決心したのは――、

3

盛岡の藤村博君という若いサイクリストが、わざわざ渋民への案内を買つてくれました。彼はCFCの会員ですがこの地方ではきつと珍しいだろうと思われる、クラブマンエースに乗つてきました。でもタイヤは1⅜吋をつけています。前の日も私は盛岡サイクリング・クラブの人達について、駒形神社の「チャグチャグ馬つ子」というお祭りを見にゆき、小岩井農場までいきましたが、一¼吋の車をもつてこなくて良かつたと思いました。この辺の道は、あまり良くないのです。やはりクラブマンエースでもタイヤは一⅜吋が常識だろうと思つていたところです。

藤森君はツーリング・バツグの中に、岩波文庫の啄木歌集と、「啄木のふるさと」というパンフレツトなど、何冊も私のために集めてきてくれました。そして、日陰門外小路の小田島旅館まで私を迎えにきてくれたのです。あとで聞きましたら、この旅館は啄木が中学時代かよつた塾の跡とかで啄木ゆかりの地の一つだそうです。

その日のコースは、私の希望で、北上川の東、つまり今では裏道となつてしまつた旧陸羽街道にとることにしました。一つには常光寺といつて、啄木の生れた寺に立寄りたかつたからですが、それよりも大きな国道を走つて渋民を訪れるのは、いかにも私の気分にそぐわないと思つたからです。それに私の経験では田舎の国道は、サイクリングには向かないと考えていますし、わざわざ土地の人が案内してくれるのに、真直走れば事足りる国道を選ぶ手もないと思つたわけです。ですから、国道の方が楽だという盛岡の人々の忠告にも、なにか悪い気がしましたが帰りに通ることにして、往きはあえて従わないことにしました。

鶴飼橋から見る岩手山、川は北上川

盛岡は南部侯の城下町です。その翌日には藤森君と二人で一日中歩きまわりましたが、たいへん人懐こい表情をした町です。そして青春時代を過すにふさわしいロマンの香りが漂よう町です。四ツ家町から左へ折れれば旧陸羽街道になりますが、しばらくは下町のような感じの家並が続きます。でもやはり城下町らしく、永い歴史を秘めた住居の臭いが、細い道一ぱいに匂い出してくるような感じでした。

左に綜合グランドを見、右にスケートで有名な高松池を見送りますと、小さな登りになり、鋪装も切れて郊外へ出てしまいます。郊外といつても東京のそれとは大変に違つており、山間の部落へ入りつつあるといつた方が本当かも知れません。修道院の前を過ぎる頃は、もう全く山間の道といつた方がいいくらい、風景が変つていました。いくら自転車で走つているとはいえ、あまりにも早い風景の変化には驚かざるを得ませんでした。それというのも、盛岡の町があまりにも美しく立派だから余計に感ずるのかも知れません。

道はどこまでいつても、そんなにひどくはなりません。トラツクが通るには都合が悪いのかも知れませんが、自転車でいく私たちにとつては適当な屈折があり、登り下りがあり、なによりも木々の若葉も雑草も埃をかぶつていないことが素晴しく思えたことでした。ときどき岩手山が姿をあらわしますが、丁度東京近辺でいえば都築丘陵の道を走つているときのように、凸凹な地形なために、すぐ山はみえなくなるのです。

どのぐらい走つたでしようか。小さな物見櫓が右側にありました。丸木で作つた粗末なものでした。私たちは車をとめてしまいました。そして、ぐらぐら揺れるのを恐しいと思いながら上に登つてみました。この辺は丘がいりくんでいて、おまけに道がくねくね曲つているので見晴しの悪い所ですが、この櫓に登つてみると、盛岡の方も岩手山も一望できるのです。私は昔の旅人を想像しました。人の踏みかためた草の中の道を探り、方角が不安になると高みへ登るという話です。おそらくこの物見櫓はそのために建てたものではないと思いますが、それにしても、見晴しのきく所へ登つてみなければならないことが何かあるのでしよう。そうでなければ誰も櫓を立てますまい。ところで私はもう一つの山をみるように藤森君に注意されました。それは南昌山といつて、南の方わずか西寄りの山ですが、盛岡の人々が天気を知るのに重要な山だそうです。頂に雲がかゝれば雨になり雲がなければ晴になるといわれています。単純なことのようですが、永い間の観察によ

農家も、森も畠も、みんな非常に低い位置にへばりついてしまつたのではないかという昔話に溶入るのです。或いは普遍性のなるほどに若葉の臭いがむせかえるように漂つてくるのです。

5

たが、かわいそうだと思つて、皆の中へ連れていつてやりましたが、一番隅つこで孤立していました。人一倍ふるさとを愛し、しかも村の人々に追われなければならなか